群青の海に祈る

西岡　瑠璃子

2005・12

九条を守るおみなら団組みて特攻の町「知覧」を訪ぬ

数え日に知覧の旅を企てて特攻の兵士らの遺書に対(む)かわん

特攻の母に守られ辞世の句遺して群青の海に散華す

皇国の久遠祈りて桜花(さくらばな)咲くこともなく散りし海峡

ふたたびを生きて帰らじ特攻の若き兵士のみ霊に祈る

一千余のみ霊に祈る知覧平和館すすり泣く声おちこちに聞こゆ

海の面（も）を隔て聳ゆる開聞岳を臨みて祈る永久（とわ）の平和を

ホタルになりて帰って来ると飛び立ちし特攻の兵士のみ霊安かれ

知覧の池絶えだえにして流れ行く紅葉のいくつ屍のごとく

蕾かたき桜並木に続きゆく一千三十六柱のみ霊安かれ

辞世の歌遺して散りし特攻の若きらの魂（たまほご）反故にはさせぬ

改憲に屈してならぬ平和祈（ね）ぎ知覧を歩む十二月八日

〈女性「九条の会」高知に掲載〉

湯の街紀行（金婚旅行）

2008.3

紅葉（こうよう）を映して流れる大聖寺川滔々として湯の街のなか

紅葉(もみじ)狩りの人に押されて渡りゆく五十年ぶりの蟋蟀(こおろぎ)橋は

枯れくちし葛をまといて山毛欅(けやき)の樹　偉容保ちぬ鶴仙渓に

足弱き夫の姿を振り返り振り返りつつ渡るあやとり橋まで

半世紀前に訪ねし温泉町合併されて加賀市となりき

窓越しに湯煙の立つ宿の朝　川鴨の姿態をレンズに捉える

ここだくを踏みしだかれし紅葉の一枚拾いて蔵書に挟む

〈月刊短歌誌短歌往来に掲載〉

啄木慕情―比翼の歌碑―

2009・12

啄木の父一禎終焉の地の高知駅前に親子の絆結ぶ歌碑建つ

水の秋啄木父子の慟哭も刻まれ高知駅前に建つ歌碑

『一握の砂』『みだれ蘆』より啄木と一禎父子の比翼歌碑なる

秋霖の前線予告を確かめて啄木父子の除幕に急ぐ

若きらのあるいは離れ住む人の出逢いの場所ともなれかしと願う

わが国の現実の態そのままに啄木の詠む貧困の歌

漂泊の旅経てたどり着きし地に啄木父子の再会の碑なる

形よき緑色岩の自然石に刻まれし美学と思う啄木・一禎の碑

〈月刊短歌誌短歌往来に掲載〉

國生み

2013・1

縹渺の地の上に満ちてくる初日(はつひ)のなかを群れる子雀

国生みの古事記を読みて淡路島に固有の領土竹島を重ねる

仮設住宅に二度目の厳冬迎えいる人らに凍てつく復興予算

コリオリの力及ばぬ列島に嵐のような春の風吹く

南海トラフ地震津波の想定にペットボトルは冷蔵庫にひとつ

読経の手休めて僧は仏壇の漆金箔の塗り替えを勧める

いましばし吾が生くる身に安らぎの余白のほしき山茶花零る

〈短歌総合誌『歌壇』に掲載〉

色うき国

2013・7

咲きそめる日も早かりし桜花散る日を急ぐ攫(さら)われるかに

微粒子の霧を浴びるか大陸の故なきことのなきまつりごと

病み臥せば装いて行くあてもなく吊しし去年(こぞ)の気に入りの衣(きぬ)

廃田の続く旅路を夫と行く色うき国の春一番吹く

大いなる錯誤のありて傷つけし人への思い自己嫌悪に満つ

〈日本歌人クラブ『風』に掲載〉

消化器内科病棟

2013・7

消灯後の病室の天井に歌のことばを這わせてまどろむ

小恙が大病となり初夏(はつなつ)のベッドに数える五句三十一音

日曜の休診の日も回りくれ吾がいらいらを癒せる主治医

弱音吐く吾が給食の膳を下げ励ましてゆく栄養士のいて

街の声途絶えし部屋に点滴の管ぶら下げて息深く吸う

〈短歌総合新聞『梧葉』に掲載〉

夫を詠む

猫ばかり集う公園の補修為し遊具整うる町内会長の夫(つま)

ペアでと夫(つま)の買いくる草木染めのロングスカーフ春浅き日に

七河川(ななかせん)一斉清掃の川べりに夫(つま)と引き上げる雑草と空き缶

あと少し残り世をともに生きたしと夫と語る朝の食卓

乗り継ぎの駅構内をうろうろと金婚旅行のわれら夫婦は

ひかり野に満つることを恃(たの)みつつ金婚の春を健やかに生きたし

牛乳びんの蓋開けかねる麻痺の手に新聞を読む元記者の夫(つま)

足弱り手に麻痺残る夫(つま)なればやさしき時を共有したき

夜の床に眠れぬらしき夫(つま)の咳聞きつつ夜なべの手を止め得ざり

バリアフリーの手摺につかまり上下する外出少なき夫(つま)の歳晩

カメラ持ち車椅子にて旅をする夫(つま)と迎えん新玉の年

映像を観つつ発する夫(つま)の声スポーツ音痴の吾は寡黙に

近詠の中から

2004～2013

雪被(かず)く四国山脈はるけくも野に摘む若菜に光耀う

鵯(ひよ)の来る臘梅の枝に初蕾さして賀春の空真澄なる

歳旦のひかり仰ぎてあと少し耀いながら生きたしと願う

災害も殺戮もなき新年(にいどし)を願いて賀状の厚き束解く

渇きゆく無援の白き街並に紅梅一樹気迫を見する

水やせて青春はるかと師の詠みし吉野川辺の紅(あか)き葛花

高校生に歌を詠む人いませんか教師の次男に歌誌を託しぬ

祖母われは代理参観窓際に視線を逸らすシャイな男(お)の孫

流星群天翔(あまかけ)る方(かた)にイラクの子ら銃声止まぬ日々を生きおり

ノーメイクで眼科より戻る風の道　昨日と今日の世界が変わる

隠し事ているらしき幼の眼われに優しき言葉かけゆく

行きつけの花屋の今朝は閉ざされて見知らぬ男がペンキ塗りおり

「九条」の署名集める朝市に土の匂いの媼の手が伸ぶ

風雪に研(と)がれし吾が身はしなくも華やかな知らせ受ける錦秋

荷を解けば四万十の鮎香に立ちて漁(すなど)りし人の心偲ばる

湯の里の滝川を流れる一ひらの命のような若葉に遇いぬ

美術館のルノアールの前若き日をスクラム組みし友に出会いぬ

憲法の危機を思(も)いて集い来し人ら五月の風に触れ合う

失せ物を探してひと日暮れゆきぬ吾が残照のなお短きに

広島の遺児の追悼しみわたり映像に襟ただす今日原爆忌

雨の日の葬(はふ)りに黒き蝙蝠傘の滴(しずく)を払い哀しみはらう

プランターに育てし苺うなかぶし穀雨に小さき粒の輝き

樗の実のここだ残りし枝の端(は)に白鷺一羽孤高を保つ

いじめ苦に幼きいのち断たれゆく秋蝶ひとつ飛び交う真昼

水ひびく山の谷間に秋あかね別れし人の振り向かずゆく

一瞬に雪崩れるごとく曼珠沙華狂える地球に抱(いだ)かれて咲く

「おるき」とはやがて楽しく面白き星の命名土佐弁が翔(かけ)る

風のように光のように旅立ちし師は安らかに柩のなかに

花冷えを薄ものをまといて街に出る真昼のアンニュイ散るさくら花

浅蜊採る舟は一艘も出(い)でずして店頭に並ぶ外(と)つ国の貝

残されし命を生きて歌詠みぬ枯れ木累々政治の冬に

米どころ抑えて生(あ)るる日本一「土佐天空の郷(さと)」の挑みし

海浜に打ち寄せられて乾きゆく石蕈(あおさ)の見せる哀しみの波

麦藁帽子押さえて歩む田舎道渡り来る風無韻のカリヨン

影法師曳きつつ歩む秋の夜のことば少なき親子の語らい

ひとすじの人生のあり水無月の万緑のなかに吾が影映す

鳴きつつもいのち燃やして蝉しぐれ今朝を旅立つ吾を励ます

低体温のわが身のうちに水銀は上がりゆくなり八月十五日

風の日に届きしという京扇子柩の胸に抱きて逝きしか　（河野裕子さん）

街角に秋の風連れやって来て移動図書館のメロディ弾む

不条理のまつりごと身にしむこの秋を海鵜（うみう）啼く声波越えゆきぬ

外房の波暖かく膨らみてあしたを生きる人間家族

ケアハウスの窓から友も観ているか今宵十五夜の月は真ん丸

初明かりとう靄の漂いのぼり来る空を仰ぎて迎える元朝

硯の水はつか注ぎ足し墨を磨る追悼の歌詠む花冷えの宵

草莽（そうもう）のおみないざ立て「九条」の戦（いくさ）なき世を守らんがため

肩パッド外して古き服を着る私自身のスリムな改革

アジアからの厳しきまなこ靖国へいま問われいる歴史認識

黒き肢体を切り返し飛ぶ夏燕われにも欲しき決断のとき

南いに疲れし叔父の葬(はふ)り終え吾が出口なき地下街をゆく

歳月の襞おりなして血脈のまた一つ消ゆ吹雪の春に

新道の傍(かたえ)に淡く咲く樗(おうち)　煙草屋ありし杏き日のまま

この街の最後のパン屋が閉むる朝　掌(て)にほかほかの香をいとおしむ

何かしらやる気なくして落丁の本を見ているような日の暮れ

一日を探しものに明け暮れて損をした日の茗荷の苦さ

些細なることだと割り切れない電話テレビの音を低くさせおり

今日こそは心患うことなしに居たいと留守電セットしておく

初夏(はつなつ)の山形からのさくらんぼこの艶っぽさは汚染を知らぬ

児(こ)ら帰り遊具しずもる公園のベンチに拾う朱き落葉

毒矢吹く政権の蔭に生きてゆく戦争を潜りし老いびとたちは

私の周りに吹き寄せる秋風に髪乾かしてすべてを許す

夜もすがら吹き荒るる嵐しばらくは土佐路を逸れて怠惰なる秋

この一年

松岡建造

南海地震茫々として七十年　竜馬の銅像にわが帰りきぬ

放射性セシウム汚染は心臓の鼓動を　ふひに狂はせるらし

黒鮪の切り落としはや売り切れか棚をちらりと見返りてゆく

春一番吹かずじまひの彼岸にて甲子園球場に霰たばしる

クレーンは庭に植木を降ろしをり二月の昼の光の中に

宇宙なほ膨らむらむを人の世は握り鮨までか細くなりぬ

迎撃用ミサイル都内に配備さる米より買へるそは宝物

看護師に医局が贈る腹帯(はらおび)ぞ五ヶ月先は安産にあれ

夢に来て我が診てをる朝方の男は面(つら)を結ばざりけり

たまさかにわが老い影が老を越す声をかけたき心残して

整理へと朝動けばむっくりと手を広げ立つ物欲の念

地下階の漬け物売り場に廻りきぬ伊勢沢庵が妻の好物

体ごと我にキスする愛犬の尾は手にふれて固くありけり

広島の市電通りに幾山の死者積まれたる火葬はありき

女子バレー集合写真の前列のまばゆき脚(あし)よ　銅メダル取る

迂回して閻魔大王にぬかづかむスピード時代の落伍者われは

坪庭に聞きしが玉音でありにけり六十七年目の空耳の「朕」

テレビよりパンダの産声流れたり響きするどき獣(けだもの)の声

つるべさん民族衣装にブータンをぶらりと行きて「家族に乾杯」

冷やしたる素麺の糸しらしらと落ちゆく時に食道は滝

秋の蚊は忍者のごとし鳴き寄るを扇にて打てば

その手を刹すも

赤チョッキに桜もみちを渡りゆく老いたる目には

深紅ゆかしく

旧タウンの改造成れる中央に介護施設がでんと建ちたり

砂糖へと戦後並びし列ありき　デパートのケーキに当世の列

敗軍の将に凍むらむ霙の日泥鰌は穴にふかく籠もらむ

表土こそ田地の命　その田井の表が除染に剥がされてゆく

尖閣に心ゆらげば黄砂さへ何か不気味に染まりて見ゆる

団十郎・大鵬が後先逝ける春、我は誤嚥をけさも無事越す

肉も腱も骨化してゆく青年が山中教授と世に出会ひたり

飛魚の肢体思はせ沙羅嬢はスキージャンプをぐんぐん飛べる

戯れに店のダンベル挙げむとし腰は悲鳴すただの五キロに

西安のかの日の黄砂思はれて六甲霞みのみそらを仰ぐ

売り場にてわが家の冷蔵庫を思ひ妻を思ひて買ひ物をする

老いの背の痒き一点闇空にちかりと灯る星の如しも

午後四時の日は電気屋の屋根に敷く太陽電池をたっぷり照らす

楠の花香りを降らす下陰にわれはすがすが肺腑を開く

リクライニングベットを倒しゆく我に仰臥着地の快楽が有り

アベノミクスに先ず忘へたる改築の槌音通る街の明るさ

超高層ビル中程に大ホール　支への柱一本見えず

戸の口のアジサイ咲きて六月のわが家の唯一青き花群

句集 木守柿

伊野部　敦子

つくばいの　筧も青し　冬構

冬灯　夜話をして　去りにけり

和が家に　我が椅子のあり　梅の晝（ひる）

菜の花や　岸の彼方の　かがやけり

大空を　独り占めして　鯉幟

百花苑　百の家族や　子供の日

里帰り　冷し西瓜や　みな昼寝

目光の　空揚げ盛るや　繊部皿

逝き給う　白寿の翁（おうな）　花の雨

羅（うすもの）の　仕舞を舞うも

ひとりかな

秋兆す　訣れのあとの　椅子たたむ

今日生きし　あかしのしかと　櫻散る

父の忌の　櫻吹雪を　往きかえる

明日は明日　菖蒲湯に　眼をつむりけり

たどり来し　起伏の道や　春の雨

忘れたく　時計をはずす　花の冷

紫陽花の　千の下ゆく　堰（せき）の水

疎開家の　眠られぬ夜の　遠蛙

シャガールの　青にぬれつつ　夏館

房ごとに　風を選びぬ　百日紅

芸の道　ただ一筋に　単帯

三世代　願の糸の　それぞれに

水底の　ごとき空あり　半夏生

岬への　坂道続く　鰯雲

ふりむかず　生きて行きたし　雲の峰

明(あけ)易し　門前にはや

曜市が

青桐の　木陰は広し　関所あと

亡き姑（はは）の　年ともなりぬ　門火焚く

メルヘンの　秋の館を訪ねけり

野地菊や　野点（のだて）のてまえ　進みつつ

秋蒔きの　種子選びいる　母の背な

蓮の葉に　押されて蕾　また動く

静かなる　月日の庭や　萩の花

ふつふつと　白粥炊きぬ　秋黴雨（あきついう）

客として　息子(こ)の家に居り　秋扇

秋茄子の　手に染む色を　漬けにけり

朝方に　夜具かけやるや　そぞろ寒む

消息を　聞くゆで栗を　食べながら

秋日和　ただカルストに　惚(ほう)けたり

竝びたつ　秋峯の中　寡黙たり

秋高し　村営バスに　一人座し

木守柿　子に伝えたき　事おおし

主人鍋島を想う

鍋島　淳子

鍋島が亡くなって丸六年経ちました 股間節骨折が引き金で帰らぬ人となりまして お坊さんのお話で 成仏するまで仏に導かれて 浄土を歩くのです とおっしゃったので 私も一緒に歩こうと 毎朝五時から六時の間に二十分位歩き続けて居ります。

主人の想い出を素直に作句して 渋柿誌に投句しましたら 六句取り上げて貰いました その内の五句です

初桜明けゆく空に瑞瑞し

春うれし半音上げて歌いけり

眼つむれば哲学の道花の頃

夫の忌や春満月でありしこと

春来れば亡夫に会いたき日暮れかな

ささやかな句集　暖流

川村　愿

題「すずしろ」（清色）

すずしろを　たべのこしおり　孫のわん

題「すいかずら」（忍冬）

すいかずら　すいかずらとて　日の出みる

この句は「ほととぎす　ほととぎすとて　明けにけり」（加賀の千代女の句）が頭にありました。

題「たんぽぽ」（蒲公英）

たんぽぽを　手籠にいれて　土手をゆく

題「太陽」「月」など

「太陽」は　灯火親しむ　主人公

私としては苦肉の策で「太陽」を主人公の名前にしました。

題「虫」「昆虫」など

ガラス戸を　ぽんと叩いた　五月蠅

これは中学２年頃　高知市北奉公人町の実家の縁側で、ガラス戸を叩いた蠅を見て浮かんだ句で、当時元気だった父が側に居たので、云うと「よく五月蠅なんて知ってたね」とコメントしてもらった懐かしい句です。

本当は五月蠅なんて知らないけど、つい浮かんだものでした。

題「梅雨」

梅雨晴れに　物干し竿を　拭う母

題「虫」

里山の　樹々に語るか　蝉の声

サンシルバーは、山を伐り拓いて建てたもので、まわりを　樹々に囲まれています。

題「山」

特急の　車窓に　迫る　夏の富士

高知へ帰る新幹線の中から見た　黒くて、どきっとするような富士山を思い出して書きました。

題「祝い」等

山はらに　こまめ桜の　競い咲く

サンシルバー町田の四階食堂の窓から見える背の低い桜の木3～4本、こまめ桜とも云うそうです。

皿鉢（さわち）には　自生の柚子と　雪化粧

土佐の皿鉢料理は府中の庭に自生した柚子と淡雪の羊羹を盛った感じ。　府中の自宅の庭には小鳥が落とした種からゆずの木に実がなりました。はじめ何の実か分からず、皮に軽く爪をたててみると、ゆずの香りがして、初めてわかりました。

今はすっかり大きな木になって、毎年沢山実をつけている筈です。ただ2～3年自宅に帰って居ないので、放ったらかしで、胸が痛みます。子供が時々帰って様子を見てくれますが、いつも駆け足の、短時間で、柚子を見てという余裕がなくて……。

植木屋さんに頼んで年1回は手入れをしてもらっています。

多摩の山　夕日に浮かぶ　渡り鳥

ドルフィン八王子の部屋から多摩の美しい山が見えます。
夕日が綺麗です。

芍薬の　蕾開けば　濃いピンク

芍薬の蕾十本とカーネーションは淡いピンク。
芍薬の紅紫と良く合います。
≪カーネーションセットのお菓子は文明堂（赤いカーネーション十本とカステラのセットです）子供達の気持ちです。≫

「流れ雲」

中島　俊輔

全力疾走

何に驚いたのか　白い鳥のひと群れが
ぱっと飛び立ち　飛び去っていく
低く低く高く　また低く
それは流れるような弾道を描いて
ぼくたちの網膜に刻み込まれる

南風号

うたた寝をしていると話し声が聞こえた
わたしでいいの？　あなたの奥さんになる人

いいもわるいもないさ
もう一人はいってるんだから
列車が激しく左右に揺れ
窓の外には大歩危小歩危

はりまや橋交差点

むかし高橋写真館があった辺りに
こぎれいなギターショップができていて
スペインの若手作家の手になるという楽器を
店の女主人が奨めた
ねえ　死にとうなる音と違う？

帯屋町

よさこい踊りの轟音が通り抜けて行く
揃いのハッピがひるがえり

半裸身が反り返る
そして静寂
おもむろに立ち上がって老骨を延ばす

天守閣

支配と戦闘の構えの中に立つ急峻な階段
古色を帯びた木質は黒光りして
そこに女人の姿は似つかわしくないが
いま若いカップルが登っていく
ぴたジーンズと白いふくらはぎ

桂浜

とどろく海の波洗う岩礁の上に
白と赤の装束の巫女さんがいて
登ってくる人におみくじを売っていた

一つ買って開いてみると
小吉　また良し

室戸岬

ただ広い空　ただ深い海
音が消え　音が甦る
色も褪せ　色また甦る
空中を漂う塵　ちり　チリ
ああ無限に微小で　無限に透明な

やまもも

きみのくちびる
きみのちくび
きみのちしお
きみのたましい

ぼくのいのり

巨峰

きみのかぼそい指先に紫が染みいる
つぼめた唇　したたる果汁
一瞬　頭の中で時間がリワインドを始め
止まったさきには
むらさきのものがたり

別府再訪

汽船の代わりにジェット機で行く
海岸の遊歩道はオアフ風
海地獄　血の池地獄はいまも見ものだが
青春の昂ぶりは甦るすべもなく
湯布院への旅に思いをつなぐ

湯布院

センという木のお盆に出会ったのは「アトリエとき」
彫刻面の木目が描き出す偶然のアート
傾ける角度で　キラキラとさまざまな絵を描き出す
どんな種類の　どんな木部も素材になると言う
凡にして非凡　まるで湯布院のようだ

岡城址

「荒城の月」には失われた半音がある
犯人は　滝廉太郎の原譜に手を入れた山田耕作だ
以後　東洋の不可思議な神秘性も消えていた
ドイツのスコーピオンズが来日して半音を蘇らせた瞬間
背筋に戦慄が走り　目頭が熱くなった

阿蘇山

またもや一面の霧　1メートル先も見えない
土佐高の修学旅行のときと同じだ
ケーブルカー駅の売店のショーケースの中では
土産物のガラス柱に閉じ込められた小さなバレリーナが
いつか来る出番をひっそり待っている

くまもん

熊本城も水前寺公園も　このゆるキャラにカタナシだ
歩き疲れてカフェにはいり　窓際の席に陣取る
窓ガラス越しに長い城壁と市電が見え
圧巻は
座っている長大なムクの飫肥杉作りのテーブルとベンチだ

さて思想というもの

どの人の思想も生きざまも
深く生い立ちに呪縛されていて
誰もそこから逃れることができない
ぼくの場合は
昭和の軍国主義

音楽

ある人には騒音
ある人には東風
ある人には装飾
ある人には記憶
ぼくには太陽光

楽園

マウイのハナに行ったら
突然ハセガワゼネラルストアが現れた
半世紀前の歌のタイトルだ
ここにはジョージハリソンの別荘もあって
時は海風に乗ってゆったりと流れている

MEMOIR

よくは分からないが
あのバラック校舎の時代に
すべてがあった
あとはただの
つけ足し

そして　いまここ

わが胸にあるすべて
それはトータルで
幸
秋空に浮かぶ流れ雲

完